

[Memorabilia]

—Pethau Cofiadwy mewn Astudiaethau Cymreig—

Rhif 6: 水谷 宏「Llan- で始まるカムリの地名：かな表記の問題」

カムリの地名でもっとも多いのが、Llan- で始まる地名である。カムリの地名が次第に英語化されていき、あるいはカムライグ語の綴りを残しつつも英語式の発音が次第に定着する傾向にあった時代に、カムライグ語の姿を残そうとの努力の一つとして、カムリ大学に委員会が設置され、地名の綴り字の標準化を目指して刊行された *Rhestr o Enwau Lleoedd* 「地名辞典」(1975) には、カムリ全域の約 7,800 の地名が収録されている。その内の 7% に近い 531 の地名が、この Llan- で始まっている。実際にカムリの国を旅行してみると、毎日、どこかで、「Llan- で始まる地名」に出会う。

さて、この Llan- の発音は、国際音声記号 IPA を用いれば、[lan-] と表記される。英語にも日本語にも存在しない発音の仕方であり、従って、かな表記に際しては、問題が生じる。英語式の発音でも、英語の 'l' の発音を代用して、

しばしば [lan-] と発音されることが多いようである。英語経由で日本語化されると、当然、「ラン-」とかな表記されてしまう。表現の自由、表記の自由、という建前からするならば、それも致し方ないとも思われる。

他方、IPA で [ɬan-] と表記された場合の、[ɬ] の記号の意味は、「無声、歯茎、側音、摩擦」という4つの調音的特徴を表している。声帯の状態は、「開いた」状態であり、従って、無声子音の一つである。英語の 'l' の発音に見られるような有声音の特徴は、決して存在しない。調音の位置は、英語の 'l' と同様に、舌の先、舌の前方部分が、上の歯茎にしっかりと付いているので、「歯茎音」と呼ばれる。カムライグ語の [ɬ] の子音が、英語の 'l' の子音と共有している調音上の特徴は、この「歯茎音」の特徴だけである。「側音」と呼ばれる「舌の側面」を呼気が流出する調音特徴も、英語の場合は「両側」bilateral であり、「舌の両方の側面」を通過して呼気が流出しているのに対して、カムライグ語の [ɬ] 子音の調音では、呼気は、「舌の、左右いずれか一方の側面」を通過しているのである。従って、英語の「両側音」[l] では、しばしば「流音」と印象的呼称で呼ばれるように、滑らかな有声音が発せられるのだが、カムライグ語の「単側音」[ɬ] の調音では、かなり強い「摩擦音」が発せられるのである。

このような調音的特徴に基づくならば、カムライグ語の [ɬ] 子音を日本語のカタカナを用いて表記する場合、「ら行」は不適切であり、「さ行」の方がカムライグ語の原音に近いことになる。例えば、Llangollen [ɬan'gɒlɛn] は、「ランゴレン」では英語の発音には限りなく近いようだが、カムライグ語の原音からはかなり遠い発音になり、不適切である。「サンゴセン」と表記すれば、原音にかなり近い発音となる。

因みに、カムライグ語の [ɬ] 子音を、IPA によらない発音表記の一つの方法として、'hl' や 'lh' などが用いられることがあるが、いずれも、音そのものは IPA で表記されている [ɬ] を表していて、決して「フル」とか「ルフ」というような発音実態を表すものではない。IPA が専門的であって、一般読者には馴染みがないので、普通のアルファベットを用いて 'hlan' や 'lhan' と書き表しているだけのことであり、そのように表記されているものをかな表記する場合も「サン」の表記が適切である。かの有名な植物学者・地理学者・考古学者・言語学者であるエドワード・スイドの人名も、Edward Lhuyd と綴られるが、まさか、「ルフイド」とかな書きすることはできない。